

Title	梁啓超における「文学」
Sub Title	Literature' in Liang Ch'i-ch'ao
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.317- 329
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0317

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

梁啓超における「文学」

佐藤一郎

梁啓超 (Liang Chi-chao) はたしかに過渡期の人物には違いないが、また不思議な魅力をもたえた業績にも富んでいる。その業績は過渡期の特徴を備えながらも、やはり独得の魅力と価値を持っているといえよう。文学の分野に限って考えてみても、その文学論と文章とは近代前史を生きた人びとのうちで、もっとも今日的な意味を含んでいると思われるのである。具体的にいえばその政治小説論と文体改革は文学革命を準備しただけではなくて、中国文学に青春の息吹を吹込んだ気配がある。それは啓蒙的思想家ないしは大ジャーナリストの多面的な活動の一部分という意味ではなくて、かれの精神の在り方自身に関係のある問題である。梁啓超は挫折を経験することがない。その政治行動・社会行動においてはたしかにそれに近い経験もしているが、内面世界はつねに情熱に満ち、決してかれの中国における彼割について疑いなどは抱かない。かれが本質的に楽天主義者であるという点もあるが、時とともにその視点が移動するために、衝激を深刻に受けないですむはずでもあるからである。

その若わかしい情熱は一種の使命感と結びつき、一つの対象から別の対象へと常に新しい主題を求めてやまないが、それぞれ相当程

度の業績をあげていることはけだし俾観というべきであろう。机上に『飲冰室合集』五帙、その冊数でいえば文集十六冊、專集二十四冊にのぼる老なる全集を積重ねてその生涯の仕事に想いをはせるとき、誰しもこの著者の並なみならぬ精力に眼を見張るはずである。かれ自身も認めているように、その興味の対象があまりに多岐にわたるために、永統的に一つ主題を追求することはできないが、その持前の集中力を發揮してどの分野においても一応の成果を収めることはできた。あたかも変革期に際会してあの積極的な政治活動を展開しながらの著述であり、また天寿を全うしたというほど長生もしていない。一八七三年、同治十二年に広東省新会県に生れ、一九二九年、民国十八年には北京で亡くなっているのであるから、数え年で五十七歳の働き盛りであった。これらのことを勘案すればますますその精力と集中力の衆人に抽んでているの想いかられるのである。

この梁啓超にとって、その「文学」は、どのような形でかれ自身を動かし、どのような形で結実しているのか。かれ自身の生き方と、はたしてどれだけ深刻に係わりあっているのか。それが中国の現代文学の方向に、かなりの影響を与えているとすれば、それはどの点において特にそうなのであるか。この小論では、梁啓超における「文学」の基本的な性格について、検討を加えてみることにしたい。

まずその経歴と業績の概略を最初に掲げておくことにしよう。それはかれが文学の専門家ではなく、普通にはどのような評価を受けている人物であるか確認しておきたいからである。『世界大百科事典』の梁啓超の項を全文引用しておく、「中国、清末、民国の思想家。字（あざな）は卓如、号を任公または飲冰室主人と称した。広東省新会県の人。はじめ広州の学海堂で考証学を学んだが、その後、康有為に師事し、万木草堂で公羊（くよう）学、先秦の諸子学、仏教学、西洋の政治学を学び、思想的に大きく転換した。1894年以來、譚嗣同（たんしどう）、楊深秀らとともに康有為に従って変法維新の改革運動に参画した。その後、上海で『時務報』を主宰し、政治改革を鼓吹するなど言論思想界にも活動した。88年、康有為らと時の皇帝徳宗に変法自強の改革案を建白して、戊戌（ぼじゅつ）の政変を起して新政を實行したが、西太后らの守旧派のクーデタによって百日天下に終った。新政失敗により日本に亡命したが、日本に滞在すること二年に及んだ。日本に亡命中に、彼は日本の近代思想に接触し、さらに一つの発展をもたらし、中国近代思想界の先驅

的役割を果たした。政治的には、康有為とともに保皇党を組織し、立憲君主政を鼓吹したが、『新民叢報』『国風報』『新小説』などによる言論思想活動は、彼の右に出る者はなかった。民国成立後は、台閣に列し、司法総長となったり、袁世凱（えんせいがい）の帝政運動に反対して討袁などの運動を起したり、憲法研究会を組織して研究系の首領になるなど、政治活動に奔走した。ところが第一次世界大戦後、欧州各国を遊歴して帰国するや、政治活動から引退し、もっぱら学問著述に専念した。『中国歴史研究法』（1922）、『清代學術概論』『先秦政治思想史』（ともに1923）など多数の著作はすべて『飲氷室合集』に収められている。筆者が神谷正男氏であり思想史の専門家だからこのような書き方をしたというのではなく、文学史阜の人が書いても百科事典の文章ならばこれに近いものになるに違いない。四百字詰で二枚足らずのスペースでは敘述のバランス上、文学に深入りすることは許されないからである。百家全書的な啓蒙家である梁啓超に対して、文学の専門辞典ではどうなっているだろうか。こころみに手元にある『新潮世界文学小辞典』を調べてみると、清末政治小説の代表作家として活躍した『官場現形記』の李宝嘉や、『二十年目睹之怪現狀』の吳沃堯、『酸梅花』の曾樸、『老殘遊記』の劉鶚、翻訳界の林紆、嚴復、新派詩の黃遵憲、文学理論の王国維たちのほぼ二倍のスペースが梁啓超のために与えられているのである。このことはいったいなにを意味するものであろうか。清末の文明全般の指導者として、文化のあらゆる分野に卓越した業績をあげたことを意味する。時代がもし安定した平和な時代だったならば、それぞれの分野で成熟の度合を深めて鬱然たる大学者の様相を示したものと思われるが、あたかも変革の季節に際会してそれは不可能となった。時事に対する関心と識見を備えている点において、或いは王安石の域に迫るものがあるかもしれない。事実光緒三十四年、西歴でいえば一九〇八年に『王荆公』全二十二章を著してその尊敬の念を表明しているのである。大学者であるとともに大政治家であることは、中国の士大夫たる者の古来の理想であったが、士大夫社会の解体期に当り、政治家となること以外に社会に働きかける有力な手段を獲得している場合には、事情は少しく複雑になってくる。それはジャーナリズムの成立によって自分の政治的理想を直接民衆に説くことが可能になり、またジャーナリズムによって生計を立てることも困難ではなくなった。そこで皇帝と皇帝を取囲む権力の側のみを向いて作ってきた詩文や、士大夫社会内部での社交のための文学も次第に変質をとげて、その結果、儒教イデオロギーを緩和してより緊急の主題と取組むようになり、伝記や墓誌銘を他人

のために書いて潤筆料を稼いだり有力なパトロンのお蔭で学問をしたりする生活を止めて、より公開的に雑誌や新聞に意見を發表して原稿料を得るようになるのである。閉鎖的な士大夫社会の約束が、たとえ半封建的半植民地的な近代化にしろ近代化の進展につれて崩れた。かれは変質を遂げつつある士大夫社会の先進分子のイデオロギーであるとともに、その美学の体现者であり、近代的な知識人として欧米および日本の文化のよき紹介者であった。故に梁啓超が文学について語るときにもこの二面のいづれかが強くあるいは弱くあらわれ、啓蒙主義の傾きが濃厚である。康有為に師事し、伝統思想内部における進化論である公羊伝を信奉し、ハックスリーの「進化と倫理」の翻訳である嚴復の『天演論』に出版さされる前から深い関心を抱いていた。かれの進化論は文学革命時代の胡適や魯迅に先だつことはなるものがあり、しかもその基調には春秋三伝の一つ、公羊伝の改革是認の思想が流れている。『変法通議』、『新民説』のように民族主義的で世界の趨勢を踏えた独自の主張と文体が生まれたのも、決して偶然ではないのである。そしてその文章には人びとの感情に熱風を吹きこむような煽動性すら備えていたのだった。

ではこの梁啓超における文学的業績はどのような範囲にわたるだろうか。ここで『中国文学史研究』、『文学革命』と前後の人々々々（岩波昭和42年）の著者であり、同書に「梁啓超について」および「梁啓超の『西学書目表』」を収めている増田涉教授の『新潮 世界文学小辞典』の記述を、もっとも信頼のおける要約として掲げておきたい。

「中国・清末のジャーナリスト、批評家、学者。字は卑如、号は任公、別号は飲冰室主人。広東省新会の生まれ。著述は各方面にわたって多いが、『飲冰室合集』（一九三六）に集成されている。清朝の末期、在野の康有為が指導した改革運動に参加し、上海の「時務報」（九五—九八）の主筆として改革論を宣伝した。九八年康有為が光緒帝の信任によって政権を握り、「戊戌新政」を指導すると、彼も康を助けて新政に参画した。だが一〇〇日余で保守派のクーデターにあい、彼は身をもって日本のがれ、亡命生活にはいったが、ただちに雑誌「清議報」（九八—一〇二）を発刊して、清朝政治を批判攻撃するとともに、国民に対する広い啓蒙運動を始めた。「新文体」といわれた独特の文体、また「筆端つねに、感情をおびる」といわれた扇動的な文章で、国民、特に青年層に愛国精神をよびかけ、同時に、近代西洋先進国の思想学説（デカルト、カント、モンテスキュー、ルソー、スマス、ダーウィンなど）を続々と紹介し

て、封鎖的、保守的な中国国民に世界に向かう目を開かせた。このような啓蒙運動の一環として、彼はまた小説の普及性を利用して政治的開発をはかるため、「小説界革命」のスローガンをかかげて、雑誌「新小説」を東京で発刊した（〇二一〇五）。すでに「清議報」の創刊号にも彼は東海散士の『佳人の奇遇』を訳載したとき、『訳印政治小説序』を書いて、「昔、欧州各国の変革のはじめ、その大儒碩学、仁人志士は往々その身の経歴、および胸中に抱く政治の議論を小説に託した」といい、今日、先進諸国の政治が日に進歩するのは政治小説の功が最も大きいとされるが、「いま特に外国名士の作で、今日の中国の時局に関係の深いものを、次々に雑誌の末尾に付ける。愛国の士のこれを」覧んことをと呼びかけている。「新小説」発刊はこの主旨に基づき、専門雑誌によっていっそう実功をあげようとしたものといえる。彼は同誌の巻頭に『小説と政治の關係を論ず』を時いて、「國民を新たにせんと欲するならば、まず小説を新たにせねばならぬ」といって「小説界革命」を唱えたが、おりから政治の不安定と、所々に動揺崩壊の兆を呈した現実の状況を反映して、中国国内にも次々に数種の小説雑誌が発刊され、政治的社会的傾向小説がおびただしく出るようになった。それが主流となつて、清末の中国小説は面目を一新した。

二

この増田教授の敘述でも明かなように、梁啓超の文学上の業績は主に新文体の確立と政治小説の鼓吹であろう。そのほか数えあげれば新派詩の提唱なども当然視野に入つてこよう。このように文学の範圍に属するものだけでも専家以上の成果をあげているが、まず最初にかれがなにを「文学」と考えていたか見ておこうとおもう。

梁啓超が『戊戌政変記』でいっているように、中国が四千年の夢から醒めたのは甲午の役（日清戦争）からであるが、かれが本格的に論壇に乗出したのも一八九六年、つまり光緒二十二年、明治二十九年に『変法通議』をひっさげて時代の脚光を浴びてからである。もともと「文学」とは学問の意味であり、『論語』の「德行には顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓・言語には宰我・子貢・政事には冉有・

季路・文学には子游・子夏。」という場合や、大学の文学部の文学がそれである。中国でいつい何時ごろから文学が今日の英国文学と云うような意味に使われるようになったか興味があるが、この頃の梁啓超の發言を整理してみると、「文学」で學問を表わす傍ら(註5)一方では今日の「文学」に近い内容を与えているかのように見える。しかし一九〇二年（光緒二十八年）の「中国學術思想變遷之大勢を論ず」や同年の「革を積く」には早くも今日の「文学」に近い使用例が現れている。たとえば前者には「而して其の時光燄万丈なる者は、尤も文学に在り。文学も亦學術思想の憑藉し以て見を表わす所なり。屈宋の専門名家は勿論、老墨孟荀莊列商韓も亦皆千古の文豪なり。文学の盛衰と思想の強弱とは、常に比例を成す。當時の文家の盛は、偶然に非ざるなり。」以下数ヶ所に見え、後者では「日人の訳名を以て之を言え、則ち宗教には宗教の革命有り、道德には道德の革命有り、學術には學術の革命有り、文学には文学の革命有り、風俗には風俗の革命有り、産業には産業の革命有り。」といい、さらにつづけて「即ち今日の中国の新學は小生の恒言にして、固より所謂經學革命、史學革命、文界革命、詩界革命、曲界革命、小説革命、音樂界革命、文字革命等種種の名詞有り。」と述べているのである。また前者では「泰西十五世紀の文学、復興自り以後、學者猶お詭弁に涉るを免れざるがごとし。」といい、「文学」と「文学」との区別にやや混乱も見られるが、文学を小説、戯曲、詩文などを包含する用語として使いだしたのは日本からの逆輸入らしいことが解る。中国にはもともと小説や戯曲の類と詩や文章を同等のものとして扱う考え方は存在しなかった。小説や戯曲、とくに白話小説のごときは士大夫たる者が公然と読むことが許されない俗書であった。かくて同年の十月に出た小説専門の月刊雑誌『新小説』の創刊号には「小説と政治との關係を論ず」の劃期的な評論が発表され、小説界革命の旗が打立てられたのである。梁啓超特有の強調形式を踏えているとしても、この一文のなかで「諸文の中、能く其の妙を極めて其の技を神にする者は、小説に若くは莫し。故に曰く小説は文学の最上乘たなるものなり。」と云って小説を文学と認めたばかりか、それに最高の地位を支えたのである。これは伝統的な詩文中心の文学観の崩壞を意味する。この結論に導くまでにかれは小説の社会的役割の重要性を説いて次のようにいっている。「一國の民を新にせんと欲すれば、先ず一國の小説を新にせざる可らず。故に道德を新にせんと欲すれば、必ず小説を新ににし、宗教を新にせんと欲すれば、必ず小説を新にし、政治を新にせんと欲すれば、必ず小説を新にし、風俗を新にせんと欲すれば、必ず小説を新に

たにし、学芸を新たにせんと欲すれば、必ず小説を新たにす。乃ち人心を新たにせんと欲し、人格を新たにせんと欲すれば、必ず小説を新たにするに至る。何を以ての故か。小説には不可思議の力有りて人道を支配するの故なり。」この対象に耽溺するような熱情と畳みかけるような筆致は、その文章をまぎれることのない彼自身のものとして染上げてゐる。これは清末の文章の潮流のなかではやゝ孤立した系列に属するものであり、清代古文の主流であった桐城派の人びととも、また漢学派の人びとの作風とも趣を異にする。強いていえば今関天彭氏が『近代支那の学芸』（民友社 昭和6）で指摘する（註7）ように、「情は哀に極まり、哀は蒼（煩悶）に極まる」と説いて、世間から偽体といわれ、袁世の文として排斥された龔自珍（1792—1841）に似ているところがある。公羊学の学統からいっても当然かれの存在は、梁啓超の意識に常にのぼっていたはずである。もちろん、修辭上のテクニクにおいては桐城派と共通するものを持っているが、これは致用の傾向において共通の気分を保ち、曾國藩（註8）は認めざるを得なかつたせいもあるかもしれない。曾國藩の「文を為るは全て氣盛なるに在り」を「王荊公」でも援用しているが、伝統的な文章作法における靜的な分析を退けている梁啓超にとつて、かなりの親近感を抱いたものと考えられるのである。

さて、再び「小説と政治との關係について」の問題に戻るが、この一文の冒頭における最大級の表現は、「吾今、且く一問を發せん。人類の普通の性、何を以てか他書を嗜むこと其の小説を嗜むに如かざる。」以下において、意外に分析的に小説の人間を支配する働きを考察している。梁啓超の文章の特徴として冒頭の最大級の表現は、常に議論が展開して行くのにつれて、さまざまな保留条件がつけられて緩和される傾向を持つのであるが、ここでは保留条件というよりも分析と呼ぶにふさわしい。かれ自身当時指おりの詩文の作者でもあったのであるから、従来いやしめられてきた小説の偉大な役割を認めるのには、自分でも心理的に納得できるものでなければならぬ。そこにこの議論の立方が外向的であるよりも内面的な分析に傾むく主な原因がありそうである。かれの文章は続く。「答うる者必ず、其の浅にして解り易きの故を以てし、其の楽にして趣多きの故を以て曰わん。是れ固より然り。然りと雖ども、未だ以て其の情を尽さざるなり。」

だが解りやすく面白いからだというだけでは説明が足りない。解りやすい文章は他にもあるし、小説は面白いというよりも驚かした

り悲しませたりするものもあるからである。このような自問自答の後に梁啓超は二つの原因に思い至っている。「吾之を冥思し、之を窮鞫するに、殆ど兩因有り。凡そ人の性、常に能く現境界を以て自ら満足する者に非ざるなり。而して此の蠢蠢たる軀殼、其の能く触れ、能く受ける所の境界は、又頑狹短局にして至って限り有り。……小説は、常に人を導びきて他の境界に遊ばせ、其の常に触れ常に受くるの空気を變換する者なり。此れ其の一なり。」

すなわち經驗範圍の小説による拡大がその第一点である。

「人の恒情は、其の懷抱する所の想像、経閱する所の境界に於いて、往往にして之を行ないて知らず、習いて察せざる者有り。哀為ると、樂為ると、恋為ると、駭為ると、憂為ると、慚為るとを論ずる無く、常に其の然るを知るも、其の然る所以を知らざるが若し。其の情状を摹写せんと欲するも、心に自ら喩う能わず、口自ら宣ぶる能わず、筆自ら伝うる能わず。……所謂、夫子之を言い、我心に於いて戚戚たる有りにして、人を感じせしむるの深きこと、此れを為すより甚だしきは莫し。此れ其の二なり。」

すなわち常人の經驗を再表現する働きの第二点である。この二点を抑えてかれは小説とその他の文章とを較べて一つの結論を提出する。ものごとを論証しようとする場合に、ただ一つだけの証拠に基づくのが危険であることは顧炎武も注意しているが、文章作法の上からもシメトリカルな構成は古文であろうと駢文であろうと中国では伝統的に尊重されてきている。また流れるようなリズム感と平易な文字の選択もかれの文章においては目立つ。清末の文章家であればその点、章炳麟と対照的であってあの難解にして執拗な文体とはもっとも縁遠いものであろう。梁啓超には反芻して問題を個人的に深化する傾向よりも、問題の本質を洞察する鋭い勘と結びついた整理がある。そして俗な言葉でいえばメリハリの利いた緩急よろしきを得た文章になっているのである。かれはいっている。

「此の二者は実に文章の真諦にして、筆舌の能事なり。苟くも能く此の竅を批し、此の竅を導けば、則ち何等の文為るを論ずること無く、皆以て人を移すに足れり。」そしてこれに続けて、「諸文の中、能く其の妙を極めて其の技を神にする者は、小説に若くは莫し。故に曰く小説は文学の最上乘為るものなり。前の説由りは、則ち理想派の小説尚で、後の説由りは、則ち写実派の小説尚ず。小説の種目多しと雖も、未だ能く此の兩派の範圍の外に出ざる有らざる者なり。」

と断定しているのである。この大胆な断定もかれの文章の魅力の一つであろう。ここで誇張法を使用して、小説を文学中の最上乘のものとして規定した筆者は、一転して今度は冷静に小説を分析する。ここで結びを与えてしまえばともかく、さもなければ議論をさらに具体的に展開した後に、この個所の高揚を踏えて結論に導くのが古来の議論文の通例である。かれはその骨法に従って議論を進めてはいたのであるが、「抑々小説の人道を支配するや、復た四種の力有り。一を熏(熏染)と曰い、二を浸(注10)と曰い、三を刺(刺戟)と曰い、四を提(同化)と曰う。」の問題提起は、小説の働きへの考察として示唆に富んでおり、小説家たちに理論的根拠を与え、勇気づけるものであった。

三

以上かれの文章の特徴を見るために、とくに「論小説与羣治之關係」を取上げて考察してきたが、梁啓超の「文学」についてはなお論すべき問題はあまりに多い。一九〇二年（光緒二十八）はかれの小説観において今ここで見てきたように一大進歩を示した歳ではあるが、かれが同じ歳に「美妙の文」の評価を与えた文筆家にはどのような人物があるだろうか。それはボルテールであり、福沢諭吉であり、トルストイであって、小説家を含む世界の啓蒙思想家たちに対してである。梁啓超における「文」は、すでに伝統的な詩文の文であることを止めて、よりひろく社会に働きかける著作家の文章の意味を持ちだったのである。しばらく「論學術之勢力左右世界」の敘述を見て行くことにしよう。

「……亦(注11)必ずしも自ら新説を出さざるも、其の誠懇の氣、清高の思、美妙の文、能く他国文明の新思想を運びて、本国に移植し、以て福を其の同胞に造(造す)す有り。此れ其の勢力も亦復偉大にして思議す可らざる者有らん。法国の福祿特爾 Voltaire 一七六九年に生れ、日本の福沢諭吉去年卒す、俄国の託爾斯泰 Tolstoi 今尙(今尚)生存す、の諸賢是れなり。福祿特爾は路易十四全盛の時に当りて、怒然として法国の前途を憂え、乃其の極めて流麗の筆を以て、極めて偉大の思を写し、諸を詩歌院本小説等に寓して、英国の政治を引き、以て時政を諷諷

し、錮せられ、逐せられて、幾ど死に瀕すること屢々なりき。卒に乃法国革新の先鋒と為り、孟德斯鳩・盧梭と名を齎しくす。蓋其の法国の民に造す有ること、功兩人に下ること在らざるなり。福沢諭吉は明治維新以前に当りて、師の授くる所無く、自ら英文を学び、嘗て華英字典を一たび手抄せり。又独力を以て一学校を創め、名ずけて慶応義塾と曰い、一の報館を創めて、名ずけて時事新報と曰い、今に至るも日本の私立学校・報館の巨擘たり。書を著わすこと数十種。専ら泰西文明思想を輸入するを以て主義と為せり。日本人の西学有るを知るは、福沢自り始まるなり。其の維新改革の事業も亦、福沢を顧問とする者十に六七なり。託爾斯泰は地球第一の専制の国に生まれるも、大いに人類同胞兼愛平等の主義を信う。其の論ずる所は蓋別に心得有りて、尽く東欧諸賢の説に憑藉する者に非ざるなり。其の著す所の書は、大率皆小説にして、思想高徹し、文筆豪宕なり。故に俄国全国の学界、之が為に一変す。近年以来、各地の学生咸専制の政に不満にして、屢屢結集し、要求する所有り、政府之を捕え之を錮ぎ、之を放ち之を逐うも、禁ずる能わず。皆託爾斯泰の精神鼓舞する所の者なり。此に由りて之を觀るに、福祿特爾の法蘭西に在る、福沢諭吉の日本に在る、託爾斯泰の俄羅斯に在るや、皆必ず少く可からざるの人なり。苟も此の人無くんば、則ち其の国或いは進歩するを得ず、即ち進歩も亦未だ必ずしも是の如く其の驟かならざるなり。……」

書き下し文に綴って、やむぎこちないところのあるのは、かれがその文章に口語系の言葉や日本語の語彙を意識的に取入れているためである。これは新文体として、従来の文章にはない新しい魅力の一つの源泉になっていた。

さて、そろそろ結論を急ごう。梁啓超の「文学」とはそもそもいかなるものであるか、その最も活潑な活動を展開した数えて三十歳（一九〇二）までの時期について考察してきたが、この一九〇二年（光緒二十八年）という歳はかれ自身の文学観の確立と、中国近代前史における文学観の転換点になっており、「文章は経国の大業」の伝統を持つ国の新しい経国的な文学観の誕生を意味する歳ということもできよう。梁啓超の表現を借りれば、フランスにおけるボルテール、日本における福沢諭吉、ロシアにおけるトルストイにおけるごとく、この梁啓超を欠くならば中国の近代の歴史もまた異なったものになったことは明かである。

(註1) 何幹之『近代支那文化思想運動史』(日本青年外交協会 昭和十四年八月) p. 78. 梁啓超の著作は、真に「汗牛充棟」である。『飲冰室文集』一部だけでも、数年の時をもってしなれば卒読する事はできない。

(註2) 『王荆公』は相当の大著で内容は次の通りである。自序、例言、目次、第一章敘論、二荆公之時代(上)、三荆公之時代(下)、四荆公之略伝、五執政前之荆公(上)、六執政前之荆公(下)、七執政前之荆公(下)、八荆公与神宗、九荆公之政術(総論)、十荆公之政術(民政及財政)、十一荆公之政術(軍政)、十二荆公之政術(教育及選挙)、十三荆公之武功、十四罷政後之荆公、十五新政之成績、十六新政之阻撓及破壊(上)、十七新政之阻撓及破壊(下)、十八荆公之用人及交友、十九荆公之家庭、二十荆公之學術、二十一荆公之文学(文)、二十二荆公之文学(詩詞) 王安石に対する興味はその後も持続し、『雙溝閣日記』宣統二年正月では『王荆公詩集李註本』を隱南より借りて、所蔵の『荆公集』を校訂している。同二月には孔子の廟に王安石の従祀の復活を請う上奏文を推敲している。

(註3) 小野川秀美『清末政治思想研究』(東洋史研究会 昭和三十五年三月) p. 356. 天演論の翻訳が完成したのは、さきに記したように、光緒二十二年(一八九六)のことで、翌二十三年(一八九七) 国聞報に掲載されて、始めて世に知られた。単行本として出版されたのは、更に翌二十四年(一八九八)のことである。然しながら梁啓超ら二・三の人々の間では、すでに二十二年(一八九六)にその草稿が読まれていた。梁啓超は草稿を敵復から借りて写したのである。彼は上海で馬建忠についてラテン文を習い、馬建忠を通して敵復を知っていた。(『梁任公先生年譜長編初稿』p. 33)

(註4) 拙稿「啓蒙家宣伝家としての梁啓超とその文学」とくに「新民説」の文章について(『現代中国』第35号 現代中国学会) 参照

(註5) 一八九六(光緒22)「古議院考」……漢昭帝始元六年、詔公卿間賢良文学、民所疾苦、遂以塩鉄事相争議、弁論数万言。……一八九七(光緒23)「説日本書目志書後」……然後致之學校以教之、或崇之科挙以勵之、天下響風、文学輯湊、而才不可勝用矣。……一八九八(光緒24)「訳印政治小説序」での文学の使用例は小説と連用しているからまぎらわしいが、明かに学問の意味に用いている。すなわち、善夫南海先生之言也。曰、僅識字之人、有不説經、無有不説小説者。故六經不能教、当以小説教之、正史不能入、当以小説入之、語録不能論、当以小説論之、律例不能治、当以小説之。天下通人少而愚人多。深於文学之人少、而粗識之無之人多。六經雖多、不通其義、不識其字、則如明珠夜投、按劍而怒矣、孔子失馬、子貢求之不得、圉人求之而得。豈子貢之智、不若圉人哉。物各有羣、人各有等。以童伯大人与僂僂語、則不聞也。今中国識字人寡、深通文学之人尤寡。

然則小説学之在中國、殆可增七略而為八、蔚四部而為五者矣。……一九〇二（光緒28）すなわち「論中國學術思想變遷之大勢」「積革」「論小説与羣治之關係」と同年に書かれた「中國地理大勢論」の冒頭の「文学」は學問の意味である。美哉中國之山河！中國者天然大一統之國也。人種一統、言語一統、文学一統、教義一統、風俗一統、而其根原莫不由於地勢。……なぜならば議論を分析的に進め、「文学」を次のように分類しているからである。……其在文学上、則千余年南北峙立、其受地理之影響、尤有彰明較著者、試略論之。（一）哲学……（二）經学……（三）仏学……（四）詞章（五）……美術音楽……（四）の詞章は詩文のみが含まれ、小説戯曲は入っていない。

同じく一九〇二年の「生計学学說沿革小史」の例言七言の第四にいう。本論乃輯訳英人英格廉 Ingram 意人科莎 Cossa 日人井上辰九郎、三氏所著之生計学史、而刪繁就簡、時参考他書以補綴之。惟著者於外国文学、方始問津、本科奥義、未窺崖略。謬誤之処、知所不免。……一九〇三年（光緒29）の「近世第一大哲康德之学說」でも文学を學問の意味に使用しており、「文学」を兩義にその後も使い分けている。康德は Immanuel Kant……至十五歳、入「奇尼福士布」大学、治神学、雖然、彼所好者在哲学、数学、物理学。故其所研究、往往趨重於此点。二十三歳、漸以文学名。……

（註6）先に「註5」で取上げた「訳印政治小説序」の結びには、早くも文学を國民の魂とする考えが見える。英名士某君曰、小説為國民之魂、豈不然哉。豈不然哉。「革を積く」では「文学的革命」「文界革命」の語があり、「論小説与羣治之關係」でも「小説界革命」の語が出てくるが、一九〇四年（光緒30）の「論俄羅斯虛無党」（ロシア虚無党を論ず）では虚無党の歴史を三期に分ち、その第一を「文学革命時期」と規定し、自十九世紀初至一八六三年までを当てている。ただし「文学革命」の語の使用例として、もっとも初期に属するものであろう。

（註7）「梁啓超氏の情的文章を綴るのは、いくらか此の人にかぶれて居るのである。」

（註8）「新民報」（光緒二十八）……曾文正者、近日排滿家所最睡罵者也。而吾則愈更事而愈崇拜其人。吾以為使曾文正生今日而猶壯年、則中國必由其手而獲救矣。彼惟以天性之極純厚也。惟以修行之極嚴謹也。故雖用權變可也。……則吾謂曾文正集、不可不日三復也。……

民國五年になってからも「曾文正公嘉言鈔序」を書いて、「曾文正者、豈惟近代、蓋有史以來不二二觀之大人也已。」といっている。

（註9）『自由書』（光緒二十五）所収、「煙土披里純」（Inspiration）……彼尋常人刻画英雄之行狀、下種種呆板之評論者。恰如冬烘

學究之批評古文以自家之胸臆，立一定之準繩。一若韓柳諸大家作文，皆有定規。若者為雙閱法，若者為單提法，若者為抑揚頓挫法，若者為波瀾擒縱法，自識者視之，安有不噴飯者耶。彼古人豈嘗執筆學為如此之文哉。其氣充乎其中，而溢乎其貌，動乎其言，而見乎其文，而不自知也。曰惟「煙土披里純」之故。

(註10)

「國風報敘例」……吾於是謂，欲使報館之天職者，當具人德，一曰忠告，二曰嚮導，三曰浸潤，四曰強聒，五曰見大，六曰主一，七曰旁通，八曰下逮……

(註11)

……亦有不必要出新說，而以其誠懇之氣，清高之思，美妙之文，能運他國文明新思想，移植於本國，以造福於其同胞。此其勢力，亦復有偉大而不可思議者，如法國之福祿特爾，*Voltaire* 生於一六九四年卒於一七七八年，日本之福沢論吉 去年，俄國之託爾斯泰 *Tolstoi* 今尚生存 諸賢是也。福祿特爾當路易第十四全盛之時，怒然憂法國前途，乃以其極流麗之筆，寫極偉大之思，寓諸詩歌院本小說等，引英國之政治，以譏諷時政，被錮被逐，幾瀕於死者屢焉。卒乃為法國革新之先鋒，與孟德斯鳩盧梭齊名。蓋其有造於法國民者，功不在兩人下也。福沢論吉當明治維新以前，無所師授，自學英文。嘗手抄華英字典一過，又以強力創一學校，名曰慶應義塾，創一報館，名曰時事新報，至今為日本私立學校報館之巨擘焉。著書數十種。專以輸入泰西文明思想為主義。日本人之知有西學，自福沢始也。其維新改革之事業，亦顧問於福沢者十而六七也。託爾斯泰，生於地球第一專制之國，而大倡人類同胞兼愛平等主義。其所論蓋別有心得，非徒憑藉東歐諸賢之說者焉。其所著書，大率皆小說，思想高徹，文筆豪宕。故俄國全國之學會，為之一變。近年以來，各地學生咸不滿於專制之政，屢屢結集，有所要求，政府捕之錮之，放之逐之，而不能禁。皆託爾斯泰之精神所鼓舞者也。由此觀之，福祿特爾之在法蘭西，福沢論吉之在日本，託爾斯泰之在俄羅斯，皆必不可少之人也。苟無此人，則其國或不得進步，即進步亦未必如是其驟也。……